

## 與謝野晶子における『源氏物語』『末摘花』『蓬生』をめぐって

——晶子源氏、「女あるじの零落」、蕪村——

加 古 美 奈 子

本稿では、與謝野晶子が影響を受けた『源氏物語』の中でも特に「末摘花」「蓬生」をとりあげ、晶子がこれらの巻をどのように受容しているかを問題にした。晶子の歌に表われる「零落した女」「待つ女」の面影に通う存在として、『源氏物語』のこの女君の姿が考えられるからである。

### 一 「梗概源氏物語」「源氏物語礼讃」の「末摘花」「蓬生」

常陸宮の姫君、「末摘花」への印象は、與謝野晶子にとって、『源氏物語』の女君の内では、好ましいものではなかったようである。源氏などおもひうかべわれはたれざりとともよもぎふとはおもはず 鉄幹宛晶子書簡（明治三十四年五月二十九日）

鉄幹宛の書簡中、自分は『源氏物語』の中の誰だろうかと思像した時、そうは言っても「よもぎふ」、すなわち末摘花ではさすがにないだろうと戯れている。與謝野晶子による『源氏物語』現代語訳、所謂「晶子源氏」のうち、最も短かく要約されている「梗概源氏物語」（鶴見大学文学部編集 池田利夫解説 一九九三年

十月十七日 武蔵野書院）の「末摘花」には、「故常陸宮の太守の宮の姫君」として、次のように概略が述べられている。

然もまた女王は醜くかった。鼻は高過ぎるばかりで無く先の方が赤くなつて居た。末摘花の君と紅の花の異名を源氏の君は新しい情人の名に附けてしまった。

『源氏物語』「末摘花」には、「あなかたはと見ゆるものは、御鼻なりけり」、「なほかの末摘花、いとほひやかにさし出でたり」とあり、それに対して源氏は「見苦しのわざや」と感じている。晶子は、その末摘花の劣った容貌を「醜くかった」と、「醜い」の一語を以て形容しているのである。また、同じく『梗概源氏物語』「蓬生」に、

この人を誰が救はう、この貧しい低能な女を慰めるのは自分が天から受けた使命だと云ふやうな感を源氏の君は抱いたのであった。

「哀れな人」である「常陸宮の末摘花の君」に、「貧しい低能な女」と、容赦のない寸評を加えている。末摘花の救済を、源氏が決意

する場面は、『源氏物語』『蓬生』の原典では次のように描かれている。

同じさまにて年古りにけるもあはれなり。ひたぶるにもづつみしたるけはひの、さすがにあてやかなるも、心にくくおぼされて、さるかたにて忘れじと心苦しき思ひしを、年ごろさまざまの思ひにほればれしくて隔てつるほど、つらしと思はれつらむいとはしくおぼす。

たしかに、末摘花は、もの言いはかばかしい女君であつたが、『蓬生』では、「あてやか」「心にくく」「いとほしく」などの形容に端的に示されるように、源氏の帰京後も忘れられた存在でありながら、いささかも変わることなく源氏の訪れを待ち続け、源氏に感銘を与えている。「末摘花」巻では、その鈍重さと見苦しい容姿が、非常に滑稽に語られていたが、『蓬生』巻では、太宰大貳の北の方によつて表現される新興の受領階級の隆盛、それに比して没落していく王族の窮乏への同情が描かれ、また、源氏の須磨流謫に際して、世情に流された多くの人々の中で、決して変わらなかつた宮家の出自の姫君の一途な姿を、いとおしむ筆致へと物語は変化しているのである。が、晶子は『梗概源氏物語』においては、その内容は省筆しているのである。

晶子が『源氏物語』の巻ごとに歌を詠んだ「源氏物語札讀」（第二次「明星」大正十一年一月）の、「末摘花」「蓬生」の詠みぶりはどのようなものだっただろうか。

革ごろも上に着たれば我妹子は聞くことの皆身に沁まぬらし

（末摘花）

道もなき蓬を分けて君ぞ来し誰にも勝る身の心地する（蓬生）  
晶子は、『末摘花』の歌は源氏の詠になぞらえ、『蓬生』は末摘花の側から詠んでいる。「革ごろも」は、『末摘花』巻に、「表着には黒貂の皮衣、いときよらかにかうばしきを着たまへり」とあり、源氏が末摘花の姿を見顕わしてしまつた雪の朝、末摘花の着ていた「皮衣」のことを言う。この黒貂の皮衣は、「げにこの皮なうてはた、寒からましと見ゆる御顔ざまなるを、心苦しと見たまふ」と、それがなくては寒くてやりきれまいと源氏に同情させ、「黒貂の皮ならぬ絹、綾、錦など」を届けさせるといつた記述も見られ、印象的である。晶子が「革ごろも」を詠んだ歌に、

恋ごろも革ごろもより重ければ素肌の上に一つのみ著る

（「明星」大正十四年一月／「心の遠景」昭和三年六月一日）  
がある（初出では「革衣」と表記されている）。この歌を大岡信氏は、

「恋という着物は革製のコートより重いので、素肌の上には恋ごろも一枚を着ているのみ」。晶子は奇抜な着想の歌人だった。これもその一例だが、歌を作った時は四十代半ば、上記は二十一番目の歌集である。多くは旅行吟のなかにまじつて、こんなまなましい歌も不意に詠まれた。心の若さを保つ練習としてこんな歌を作ったのだろうか。晶子の創作心理には

謎がある。

「折々のうた」(『朝日新聞』平成十一年)

と鑑賞しているが、この「革ごろも」は、「革製のコート」ではなく、この末摘花の皮衣ではないだろうか。「恋衣」は、晶子の歌集のタイトルにもなっている(「恋衣」明治三十八年一月一日本郷書院 山川登美子、増田雅子との共著)が、一首は、恋の情緒を解し得ない末摘花が愛用した古めかしく実用的な「革ごろも」ではなく、自分は「恋ごろも」をまとうのだという意味になる。

その「恋ごろも」は一見重たげな「革ごろも」より実は重いものだという。「源氏物語」「初音」巻で末摘花は「皮衣さへ取られにした後、寒くはべる」と源氏に言つて呆れさせている。「素肌の上の一つのみ」とは、「末摘花」の場面を連想するなら、常陸宮邸の雪の朝のような逆境にあつても、暖かな革ごろもを重ねるような無粋はすまいという気分が感じられる。「奇抜」「謎」と思われがちな晶子の「創作心理」だが、一語によつて晶子の想像が何処の空間に及んでいたのか、例えばそれが古典への経路として開ける場合がある。この歌もその例に挙げられるのではないだろうか。

先の「源氏物語礼讃」の歌に戻る。末摘花を詠んだ晶子の歌の古めかしい呼称の「我妹子」はこの場合、諧謔味のある語で、「末摘花」巻の滑稽な描かれ方の投影が感じられる。源氏が末摘花の救済を考える、

さるかたにて忘れじと心苦しく思ひしを年ごろさまざまのもの

の思ひにほればれしくて隔てつるほど、つらしと思はれむもいとほしくおぼす。

という箇所を、晶子は『新譯源氏物語』(上巻 大正十五年二月十日 大鑑閣)において、

一生妻の一人として置かうと思つたこともあるのに、外のことに紛れて忘れて居た自分を薄情な男だと女にはとられたらうと不意に思ふのであつた。

としている。晶子は、源氏が末摘花を「妻の一人」ともしようと考えていたとしている。が、「我妹子」は、やはり古めかしい用語をことさらにつかつて、古風な末摘花を諧謔化する効果をねらつたものと考えてよいと思う。「蓬生」を詠んだ「道もなき蓬を分けて君ぞ来し」は、「源氏物語絵巻」にも描かれている源氏が末摘花を訪れる場面をふまえている。「道もなき蓬」とあるが、「蓬生」には惟光の言葉として、「さらにえ分けさせたまふまじき蓬の露けさになむはべる」と語られ、その折の源氏の歌、「尋ねてもわれこそとはめ道もなく深き蓬のもの心の心」に、「道もなく深き蓬」が詠まれている。「蓬生」に、末摘花の存在は「なかなかその数と人にも知られず」と語られ、晶子の『新譯源氏物語』(既出)は「源氏の君の情人であるとも人の知らない」と訳している。晶子の「誰にも勝る身の心地する」は、そうした埋もれた立場の姫君である末摘花の至上の喜びを詠んでいる。『源氏物語』において、「末摘花」巻では源氏の視点から滑稽化され、「蓬

生」では、女君の側を中心として、嘆きと喜びが描かれていた。「源氏物語礼讃」の歌は、「末摘花」「蓬生」への正確な理解に基づいた上で、物語の人物の立場に没入して詠まれているのである。

## 二 晶子の「末摘花」「蓬生」の歌―待つ女の姿

「末摘花」を直接詠み込んだ晶子の歌に、次の例がある。

似もつかぬ末摘花に当るなどことさらめきし恋人あはれ

(明治四二年五月「スバル」／拾四二―四三)

末摘花などには似ても似つかぬ、おそらくは機知もある美しい人が、自身を末摘花になぞらえて卑下している。「恋人」とあることから、男の立場に仮託した詠みぶりである。次は、晶子が旧派和歌会に属して居た頃の初期の作品で、「蓬生」という言葉が詠まれている。

よひの間のしくれや霜をむすひけん真白になりぬにはの蓬生

(明治三〇年一月「敷島」／拾三十一)

「にはの蓬生」に、「蓬生」巻で源氏来訪の場面にも見えていた「しくれ」が配合されている。ここでは「露」ではなく、それが「霜」となった風情を詠んでいる。後の歌にも、

いにしへのさびしき人もかくしけん蓬生に居て大空を見る

(明治四四年九月「二六新報」／「青海波」156)

と、「蓬生」が詠まれている。「いにしへのさびしき人」に自身の寂寥の思いを重ねあわせている。「大空を見る」とあるが、末摘

花の邸は、「はかなき板葺なりしなどは、骨のみわづかに残れて」、「さはるべき渡殿だつ屋もなく、軒のつまも残りなければ、いとはなやかにさし入りたれば」とあるように、ささざるものなく月光がさし入ってくるというあり様であった。また、「空」の用例として、「大空の星の光」「女ばらも空を仰ぎてなむ」という表現も「蓬生」巻には見える。「枕草子」の一本に、

荒れたる家の、蓬深く、葎延ひたる庭に、月の隈なく明かく、澄み昇りて見ゆ。また、さやうの荒れたる板間より洩りくる月。荒うはあらぬ風の音。

とあり、「蓬生」の場面に通う風情が描かれ、荒れた庭に、「板間より洩りくる月」が配合されている。次の歌にも「蓬生」巻の女君の面影の投影があるのではないかと思われる。

手にふれし寝くたれ髪をわれ思ひ居れば蓬にしろき露おく

(明治四一年七月「毎日新聞」／「佐保姫」177)

「寝くたれ髪」は、女の寝乱れた髪を言い、晶子の歌では、恋人の手にふれて乱れた自身の髪への追想を表現している。このように艶な情趣は、末摘花の雰囲気とはいささか異なっている。が、末摘花も髪だけは、

頭つき髪のかかりはしも、うつくしげに、めでたしと思ひきこゆる人々にもをさをさ劣るまじう、桂の裾にたまりて引かれたるほど一尺ばかりあまりたらんと見ゆ。

とあるように、他の女君に劣らず桂の裾にあまるほど豊かで、「蓬

生」巻にも、侍従への餞別として贈った髪について、「わが御髪の落ちたりけるを取り集めて髪にしたまへるが、九尺余ばかりにて、いときよらなるを」とあり、九尺余もある見事な髪を持ち主であった。

『梗概源氏物語』（既出）においては、「醜い」「低能」といった、末摘花の寸評があるにもかかわらず、「蓬生」に描かれる、荒れ果てた邸に一人、かつて訪れのあつた男君を待ち続ける姫君の姿は、晶子の描く「待つ女」の寂寞や悲憤、怨女の面影を感じさせる歌の、古典的情緒の背景として、早くから好んで引かれたあとがうかがわれるのである。

### 三「女あるじの零落」と「紅梅」の歌―「大鏡」、紫上、遺愛の梅

次の晶子の歌も、「明星」発表以前の初期の作品である。

琴うりて涙せきあへぬ夕暮を散そめにけり軒の紅梅

（明治三三年四月「よしあし草」／拾三三18）

「琴うりて」とあるが、窮乏から女君の手慣れの調度品を売らねばならない状況におかれる、という内容が「蓬生」にも描かれる。御調度どもも、いと古代になれたるが昔やうにてうるはしきを、なまもののゆゑ知らむと思へる人、さるもの要じて、わざとその人かの人にせさせたまへると尋ね聞きて案内するも、おのづからかかる貧しきあたりと思ひあなづりて言ひ来るを、（中略）（末摘花は）いみじういさめたまひて、「見よと思ひ

たまひてこそ、しおかせたまへけぬ。などか軽々しき人の家の飾りとはなさむ。」き人の本意違はむがあらねること」とのたまひて、さるわざはせさせたまはず。

末摘花の道具類は、故常陸宮が特別につくらせたもので、古代の名人といわれる人の作なので、売つてくれという成り上がり者もあり、女房たちは急場をしのぐために売ろうとするが、姫君は父宮の遺志を思い厳しく戒める。

おほかたの御家居も、ありしよりけにあさましけれど、わが心もて、はかなき御調度なども失はせたまはず、心強く同じさまにて念じ過ぐしたまふなりけり。（蓬生）

末摘花は、困窮した状況にあつても調度は失うまいとしている。晶子の歌では、琴が売られてしまった嘆きが詠まれていたが、それはおそらく身近な十三弦の「箏」の琴である。末摘花は、「琴」の手を父宮より伝えられている。命婦が源氏に聞かせた常陸宮姫君の噂にも「琴をなつかしき語らひ人と思へる」とある。また、源氏が初めて訪れたとき、

ほのかに掻き鳴らしたまふ、をかしう聞こゆ。何ばかり深き手ならねど、ものの音がらの筋ことなるものなれば、聞きにくくもおほされず。（末摘花）

とあるように、格別に優れているというのでもないが、「をかし」という評価を与えられるものであった。

女君の「零落」を詠んだ晶子の他の歌を見てゆきたい。

紅梅や女あるじの零落にともなふ鳥の籠かけにけり

(明治三十八年一月「明星」／「恋衣」118)

先の歌にも、「散りそめにけり軒の紅梅」とあったが、この歌にも、「紅梅」が詠まれている。晶子の歌には、琴を売らざるを得なかった女と、零落した女主人のもとに、いずれも「紅梅」が配されているのである。特に、右の一首では、「紅梅」、「女あるじの零落」、「鳥」が詠まれており、「大鏡」に「いとをかしうあはれに轉りし事は」として語られる、次の場面を想起させる。

この天曆(村上帝)の御時に、清涼殿の御前の梅の木の花の枯れたりしかば、求めさせたまひしに、(中略)西の京なるそこそなる家に、色濃く咲きたる木の様態美しきが侍りしを、掘り取りしかば、家主の、「木に結びつけて持て参れ」と言はせたまひしかば、(帝は)「何ぞ」とて御覧じければ、女の手にて書きて侍りける。

勅なればいとも畏し鶯の宿はと問はばいかが答へんとありけるに、怪しくおほしめして、「何者の家ぞ」と尋ねさせたまひければ、貫之主の御娘の住む所なりけり。

貫之の娘の家の紅梅を、勅命により掘り取ってしまった折の哀れ深い歌の記述である。貫之の娘は、人知れずひっそりと暮らしていたが、歌の技量によって結局はそれと知られるところとなったのである。晶子の歌の「紅梅」には、この「色濃く咲きたる」梅を惜しんだ零落した女「家主」の姿が投影されているのではない

か。また「鳥の籠」にも、「鶯の宿」からの連想があるのではないかと思われる。晶子は、「大鏡」を愛読していたことから、この摂取の可能性は十分に考えられ、また、「勅なれば」の歌は、「明星」にも、明治三十三年四月号に「色彩の嗜好(二)」中の梅の枝の挿絵とともに、「勅なればいともかしこし鶯の宿はとはばいかがこたへん」として掲載されているのである。

一方で、晶子のこの歌を「末摘花」との関連で見ると、まず「女あるじ」という言葉が、やはり晶子の『新譯源氏物語』(既出)に見出だされるのである。

然し源氏の君はこの女がどんな顔をして居るのか一度見たいと思つて居た。ある夜そつと入つて行つた。そして覗いて見たけれど古風な教育を受けた女主人はそんな端近い処に出て居よう筈がない。外から見ると几帳などは随分ひどいものになつて居る。女達が四五人欠けた食器などを並べて食事をして居る。(中略)美しい人ばかりを見つけて居る源氏の君の目には妖怪のやうに見える人達である。

同じ箇所『源氏物語』「末摘花」は、

またうちかへし、見まさりするやうもありかし、手さぐりのたどたどしさに、あやしう心得ぬこともあるにや、見てしがなと思はせど、けざやかにとりなさむまばゆし。うちとけたる宵居のほど、やをら入りたまひて、格子のはざまより見たまひけり。されど、みづからは見えたまふべくもあらず。



几帳など、いたくそこなはれたるものから、年経にける立廻かはらず、おしやりなど乱れねば、心もとなくて、御達四五人あたり。御台、穠色やうの唐土のものなれど、人わるきに、何のくさはひもなくあはれげなる、まかでて人々食ふ。(中略)かけても人のあたりに近うふるまふ者とも知りたまはざりけり。

晶子の訳文に「美しい人ばかりを見つけて居る源氏の君の目には妖怪のやうに見える人達である」とあるのが目につくが、「かけてもひとのあたりに近うふるまふ者とも知りたまはざりけり」の訳である。「新潮日本古典集成」の傍注は「源氏は夢にもこんな者たちが貴人の邸で立居振舞うとは想像されなかった」とある。晶子の「妖怪」といった語を使った訳は、「新譯源氏物語」の特徴と言われる、かなり自由な意訳であると言えらると思う。ここで問題になっている「女主人」という語も、「古風な教育を受けた」という形容も、該当の原文にはない晶子独自の訳である。

また、「紅梅」についても、「末摘花」巻に、

「いたうけしきはましや。このころの臘月夜に忍びてものせむ。まかでよ」(中略)のたまひししく、十六夜の月をかききほどにおはしたり。「いとかたはらいたきわざかな、ものの音澄むべき夜のさまにもはべらざるに」と聞こゆれど「なほあなたにわたりて、ただ一声もよほしきこえよ。むなしくて帰らむが、ねたかるべきを」とのたまへば、うち

とけたる住処にすゑたてまつりて、うしろめたうかたじけなしと思へど、寝殿に参りたれば、まだ格子もさながら、梅の香をかききを見いだしてもしたまふ。

末摘花が、源氏の初めて訪れた夜、十六夜の臘月に格子も降ろさず情趣ありげに「梅の香」をめぐる風情が描かれている。晶子の「新譯源氏物語」の同じ場面は次のようになっている。

さうすると源氏の君は直ぐその家へ来た。

「こんな晩などは琴の音の出ないものですよ。」

臘月夜の外を眺めながら命婦が困つてかう云つた。

「そんなことを云はないで姫様のお傍へ行つて一声だけでも聞けるやうにおはからひ」

と源氏の君が云ふので、為方なしに命婦は自身の居間へ源氏の君を置いて廊下の彼方の姫様の方へ行つて見ると梅の香がするからと云つてまだ戸も閉めないで居た。

「源氏物語」の読み手は、作中人物の源氏とともに女君への期待を高めている段階で、この後に出てくる「琴」とともに、哀れな境涯にある由緒正しき姫君との風情ある配合がされていることになる。「末摘花」には、最後の場面に再び「紅梅」が描かれている。

梅はけしきばみ、ほほあみわたれる、とりわきて見ゆ。階隱のもと紅梅、いと疾く咲く花にて、色づきにけり。

(源氏)「紅の花ぞあやなくつとまるる梅の立ち枝はなつかしけれど

いでや」と、あいなくうちめかれたまふ。

ここでは、「紅梅は、「紅の花」、末摘花の鼻にかけて描かれる。

なおまた、「零落」の女君ではないが、「なつかしき色ともなしに」と言われる「末摘花」と対照的に、紫上も同じ「末摘花」巻において、「紫の君、いともうつくしき片生ひにて、紅はかうなつかしきもありけりと見ゆるに」と美しい紅のイメージを付与されている。紫上はまた、後に、「大人になりたまひなば、ここに住みたまひて、この対の前なる紅梅と桜とは、花のをりをりに、心とどめよ」と、二条院のこれもやはり「紅梅」を幼い勾宮に託すという「遺愛の梅」の印象深い場面も「御法」巻に描かれている。晶子の歌にも、

わか紫十五の君は紅梅のやうに紅して夜も寝たまひぬ

(明治三八年二月「明星」／拾三八五)

があり、十五歳の幼い紫上の寝姿が、「紅梅」「紅」を配して描かれていることが思われるのである。

#### 四 蕪村「大門の重き扉や春の暮」と「末摘花」

與謝野晶子が評釈を執筆した「與謝蕪村」(俳句講座「第五巻昭和七年七月十日 改造社」)において、「源氏物語」「末摘花」に言及している箇所があったので引用しておく。「大門の重き扉や春の暮」の句について述べた評釈文の一節である。

季節はちがふが、源氏物語の末摘花の巻に、雪の降つてある

早朝、常陸の宮の大門の古びて重たい扉を、門守の老人と孫娘の二人で開けかねてある光景がよく描写されてゐる。私は此句を読む度にその光景が思ひ出される。早朝と薄暮と、冬と暮春との相違はあるが、源氏をよく味読してゐたらしい蕪村の心に、或は末摘花の巻の光景から得た情趣が潜在してはゐなかつたか。此句を鑑賞するのに関係の無いことながら書き添へて置く。

「末摘花」巻の、「雪の降つてゐる早朝、常陸の宮の大門の古びて重たい扉を、門守の老人と孫娘の二人で開けかねてある光景」は、源氏の訪れの翌朝の場面で、

御車出づべき門は、まだあけざりければ、鍵のあづかり尋ね出でたれば、翁のいといみじきぞ出で来たる。女にや、孫にや、はしたなる大ききの女の、(中略)翁、門をえあけやらねば、寄りてひき助くる、いとかたくなり。

「鍵のあづかり」の翁が門を開けられず、その娘か孫かが助けるというくだりである。また、「源氏をよく味読してゐたらしい蕪村」とあるが、蕪村には、

雛の灯にいぬきか袂かかるなり (蕪村遺稿)

の句がある。「いぬき」は言うまでもなく、「若紫」巻で雀の子を逃がした、紫上に仕える女童である。「雛」は幼い紫上の遊び道具で、「紅葉賀」巻に、

(紫上は)いつしか、雛しすゑて、そそきゐたまへる。(中略)



「雛やらふとて、犬君がこれをこぼちはべりにければ、つくろひはべるぞ」

とあるように、紫上の雛の「小さき屋」を鬼やらいをするといつてこわしてしまつたのも、犬君であつた。「雛」から思い出されるのは、晶子の「みだれ髪」の中でも、最も初出の早い、次の歌である。

大御油ひひなの殿にまゐらすわが前髪に桃の花ちる

(明治三三年四月「よしあし草」／「みだれ髪」350)

この歌は、『源氏物語』と、それを撰取した先の蕪村の句より発想したのではないかと思われる。蕪村に、「雛の灯」とあつたが、晶子にも「ひひなの殿」の灯が詠まれている。「大御油」は、晶子の造語とも言われているが、同じ「紅葉賀」巻に「大御油参りて、絵どもなど御覧するに」と、紫上が絵を見る光景が描かれる。源氏の外出に紫上は、

姫君、例の、心細くて屈したまへり。絵も見さして、うつぶしておはすれば、いとらうたくて、(源氏は)御髪のいとめでたくこぼれかかりたるを、かき撫でて

と、絵を見さして、ふさぎこんでしまう。その紫上の髪は「いとめでたくこぼれかかりたる」という美しい様子だった。晶子の歌は、王朝の女君の長い髪ではないが、初々しい娘を連想させる「前髪」が詠まれ、さらにそこに艶なる趣を添えるように「桃の花」が散りかかっている。晶子が、『源氏物語』はじめ、古典的情緒

を撰取する技法を、蕪村に学んだ可能性を示唆する例の一つと言えよう。

底本は『定本與謝野晶子全集』(昭和五四年十一月～五十六年十二月 講談社)によつた。(一)内には(初出年月日「初出誌名」／「歌集名」歌番号)の順に記した。歌集未収録歌は「定本」に従つて、拾遺、発表年(明治―年は略す)歌番号を示した。『源氏物語』の引用は「新潮日本古典集成」によつた。

(かこ みなこ 岡山大学大学院文化科学研究科修了)